COLUMN ヤード・ポンド法と尺貫法へのこだわり

明治18(1885)年日本はメートル条約に加盟し、日本古来の尺貫法とメートル法が併用されることになった。その後1959年に計量法改定により尺貫法は廃止され、以降メートル法だけが公式表示として認められ、今では僅かに日本独自の「畳」や、「日本酒」の表示程度にしか使われていない。

今では国際的にどのスポーツも一部を除き、ほとんどメートル法が使われている。メートル法採用により、マラソンにはかつて特異な事象が見られた。どうしてあんな中途半端な距離42.195㎞となったのか、今でも多くの人が首を傾げている。

紀元前5世紀にギリシャ軍がペルシャの大軍を破り、勝ったギリシャ軍兵士が勝利を伝えるためにマラソンの地から王宮のあったアテナイまで約26マイルを一気に走り抜けた。この区間の距離、約26マイルが後年オリンピックのマラソン競技でそのまま使われ、第1回大会からヤード・ポンド法でいう約26マイル=約40㎞という不透明な距離で行われた。

ところが、1908年第4回ロンドン大会開催に際して、当時のアレキサンドラ英女王が「窓から見えるようにスタート地点は宮殿の庭にして、ゴール地点は競技場のボックス席の前に設置してほしい」とわがままな注文をつけた。イギリス五輪委員会は、考えあぐねた末に距離を1/4マイル(約402.3m)延長してマラソンは26マイル1/4とすることで女王の希望に応えた。以降オリンピックのマラソン競技は26マイル1/4に決まった。そして1924年メートル法が採用されるようになったパリ大会から、正式に26マイル1/4に当たる42.236㎞より41m短い現在のマラソン距離42.195㎞に決めたが、思い切って236mを切り捨て42㎞と決めておけば、後顧に憂いを残すことなく、すっきりしたことだろう。

そのイギリスもその後メートル法採用に移行したが、その一方で今以て頑固にヤード・ポンド法に固執している国がある。我が道を往くアメリカである。独自の競技などでヤード・ポンド法に拘っている。野球場はフィート、アメフト場とゴルフ場はヤードで表示される。

かつて尺貫法が採用されていた日本も、相撲、柔道のような日本古来のスポーツですらメートル法表示に変わった。だが、その昔ラジオの大相撲実況で土俵上の力士を尺貫法で紹介して、大きいと言われた47貫5百の横綱東富士、6尺7寸6分の大関大内山が土俵に上がった時に、実況で耳にするその迫力は圧倒的だった。今は身長や体重をあまり言わないので、耳には迫力ある大きいイメージが充分には伝わってこない。夢のような話だが、もう一度尺貫法による相撲放送を聞いてみたいものである。

エッセイスト　近藤 節夫